

敬天愛人と『土中の死骨』

宮下 亮善



南洲翁の最後について知りたい。「南洲翁は西南戦争の最後に傷を負い別府晋介に介錯を頼み自殺したとしているが、一部の学者は、南洲翁は傷を負ったときに既にしゃべることができなかったという説をとなえている。そ

のとき、仲間の武士たちが名誉ある死を南洲翁は選んだと行って死んでから介錯したとの説もある。本当はどうなのか聞きたい。」この質問は西日本国際財団主催による異文化交流におけるインド人留学生の質問です。

さて、この質問にどれだけの人々が的確に答えることができるでしょうか。とにかく思いつかない事を鹿児島の人々が考えつくの

であればまだしも福岡に來ている留学生の質問です。読者の皆様方はいかがでしょう。

鹿児島の人々が一般に聞かされている説は、いよいよ死を覚悟した南洲翁は東京に向かい明治天皇にたいして黙礼しその後「晋どん晋どんもうよかろう」と別府晋介に介錯をたのみ切腹して果てたと言ひ伝えられていました。この説にインド人留学生は疑問を呈しているということ。その真相はいかにと。

ここに、『西南戦争と博愛社創設秘話』発行者日本赤十字社熊本支部によると、南洲翁の戦いの後に行われた死体検査書には次のように書かれている。

(衣服) 浅黄縞 単衣 紺脚絆

(創所) 頭頸体離断

右大腿より鎖骨部 貫通銃創

右鎖骨部舊刀創

陰囊 水腫

いわゆる検死録です。頭と首が体から離断されたと言うのは、ゴシゴシと首をしごいて切った場合に使われるという。弾は一発、太ももより、横向きに当たっている。従来の説とはおおいに異なるものです。つまり、南洲翁は切腹をしてはいないということの意味している。

明治十年九月二十四日早朝、官軍の総攻撃が始まった。南洲翁は城山の洞窟を出て最後の方へ坂を下って行った。この様子を警視庁石神矢次郎らが護摩所のあたりから目撃していた。その後足を負傷していた別府晋介がコシに乗って続いた。別府には従僕の豊富金石衛門、小杉恒右衛門、城川市二の三人が付き添いコシを持っていた。しかし、一人に弾丸が当たり、コシが使えなくなつて、別府は従僕に背負われて岩崎谷を下って行った。別府

らが追付いた時、南洲翁は腰を撃たれ、脚を上げて止まっていた。その時官軍安村中尉は南洲翁を生け捕りにしようと近づいたが、安村に弾丸が当たり負傷した。安村中尉はなおも南洲翁をとらえようと近づき、二人は取っ組み合い、上になり下になったりしていた。その後別府は横になった南洲翁の肩のあたりを踏み、首と胴を切つて離した。弾丸飛び交う中、南洲翁最後の顛末として、この惨状が秘話として語られている。

そもそも敗軍の将は「城を枕に討ち死に」が、将たるものならいとされていた。南洲翁の場合、城山洞窟の前がその場であった。しかしそうはならなかった。何故か。安政五年（1858）十月から翌年にかけて行われた大老井伊直弼の反幕府勢力に対する弾圧は苛酷を極めた。公家では一橋派を中心に、また諸大名、幕府役人など多数が罰せられ、数

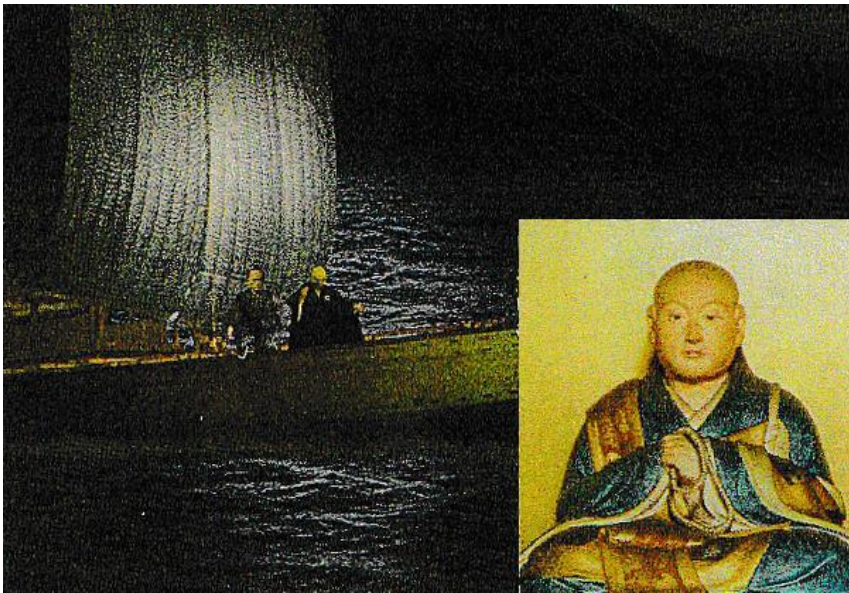
多くの志士たち百余人が連座させられた。吉田松陰、橋本左内、梅田雲浜、頼三樹三郎など有為の青年志士たちが維新動乱の中に散っていった（安政の大獄）。

“くもりなき心の月と諸共に沖の波間に
やがて入りぬる” 月照

“ふたつなき道にこの身を捨小舟

波たたばとて風ふかばとて” 西郷隆盛

勤王僧月照は勤王の志士たちと交わり、逮捕の危険を逃れて南洲翁と京都を脱出、薩摩へ逃れた。しかし薩摩藩内では島津斉彬の死後、情勢が後退し、重臣たちは幕府の圧力を恐れて月照を匿うことを拒絶し、結果「日向送り」国境で月照を切り捨てるといふものであった。南洲翁はここにおよんで月照を守る責任を果たせないことを苦にして、月照と死



錦江湾大崎鼻沖入水・月照（清水寺像）

ぬ決意をする。安政五年十一月十五日、平野国臣下僕重助とともに錦江湾を東に船出し、冬の月を眺めながら酒を汲みかわし、やがて南洲翁は月照を抱えて入水した。

南洲翁は奇跡的に助け出されて蘇生したが、月照はついに息を吹き返すことはなかった。天の配剤か、奇跡的に生還した南洲翁の懊悩はいかばかりか、土左衛門として生き恥を晒し、悔恨の念は募り、武士の面目もたない心境。いよいよ天命を悟るほかはない。九死に一生をえて、「命もいらぬ、名もいらぬ、金もいらぬ」自らを「土中の死骨」と徹底的に蔑む境地をこの時に会得したものと思われる。

このような失意のなか、安政六年（1859）に奄美の龍郷に流され、文久二年（1862）徳之島、さらに沖永良部に遠島される。

南洲翁三十四才。南洲翁を乗せた船は沖永良

部の伊延港に着いた。代官が迎えにきて、馬に乗せて牢獄のある和泊まで移動しようとした。南洲翁は「自分が大地を自分の足で踏むことができるのは、これが最後かも知れない」と言い、馬に乗るのをことわり死の覚悟の歩みを進めた。

屋外に設置された約二坪の囲い牢屋にいられ四方は壁なく、雨・風は吹き込み、半分は便所で間仕切りはなく、その匂いは充満し吐き気をもよおすほどであった。食事は囚人食として、朝一回飯を炊き薄い味噌汁。昼と夜はその冷や飯を水づけにして、一つまみの塩をふりかけて食べた。また、夕方になると無数の蚊の大群に襲われる。

このような惨状をたまりかねた牢番土持政照は代官所に出向き、囚人南洲翁の送り状の閲覧を申し出た。「囲入」とは書いてあったが、どこにも「外牢」の処置を指示され

てはいなかった。そこで土持政照は代官に対して、自分がその責任と費用をすべて負担するからと、座敷牢に移すよう懇願し代官はそれを許した。

一度ならず、二度までも死の淵を彷徨う身の上に、天は、再び生きよと赤誠の人士持政照を遣わし、維新回天の大いなる試練を与えた。

『獄中感有り』

朝に恩遇を蒙るも夕べには焚坑せらる、
人生の浮沈は晦明に似たり。

縦い光を回らせさずとも葵は日に
向かう、

若し運を開くこと無くとも意は
誠を押さん。

洛陽の知己は皆鬼と為り、
南嶼の俘囚は独り生を窃む。

生死を何ぞ疑わん天の付与なると、
願わくは魂魄を留めて皇城を護らん。

『敬天愛人』の思想はこのような艱難辛苦の
境地から悟られたものと思われる。

道は天地自然の物にして

人はこれを行うものなれば

天を敬するを目的とす。

天は人も我も

同一に愛し給うゆえ

我を愛する心を以て

人を愛する。

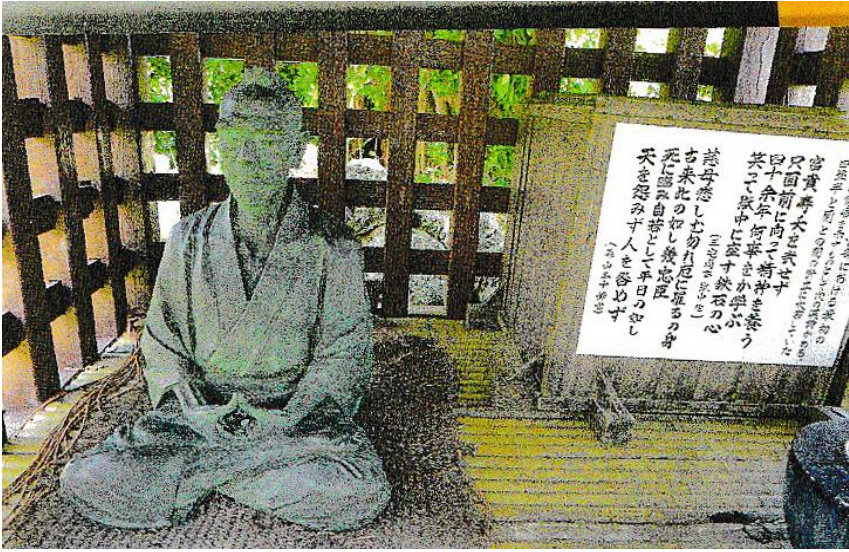
人を相手にせず

天を相手にせよ。

天を相手にして

己を尽くし 人を咎めず

我が誠の足らざるを尋ぬべし。



死を覚悟の入牢（和泊の代官所敷地内にあった牢獄）

「明日ありと思ふ心のあださくら夜半に
嵐の吹かぬものは」

親鸞上人は養和元年（1181）天台座主
慈円のもと得度受戒した。この詩九才にして
詠んだもの。以降、苦節二十年比叡山に籠も
るも比叡山を下りる。その決別の大きな理由
は、自ら悟りを求めて厳しい修行に明け暮れ
ても、その煩惱妄想を断ち切ることができず
に苦行を捨てざるを得なかったということであ
り、親鸞の苦悩は古くて常に新しい根源的
な問題を今もなお投げかけている。《妻帯の決
心》「祈ることで悟りを得ることのできない愚
かな人間である」として、自らを『愚禿親鸞』
と称した。「善人なおもて悪人おや」唯々、
弥陀の救いを願う「他力本願」の教義を確立
した。逆説的に問うならば比叡山の厳しい修

行の体験から生まれたものであったとも言える。

〃釈迦といういたずらが世に

出でて多くの者を惑わするかな〃

もう二題

〃世の中は喰うて稼いで寝て起きて

それからあとはただ死ぬるばかり〃

〃生まれては死ぬるなりけりおしなべて

猫も杓子も釈迦も達磨も〃

頓知ばなしで有名な禅僧。一休宗純和尚の歌か、道歌か、一休さんらしい皮肉まじりの歌とでも言いますか。自分自身は欲望のおもむくままに自由自在に、この世を気ままに生きたいのに、釈迦が欲を去れ、煩惱を捨てよと説教するものだから迷惑この上もないと、愚痴をこぼしている。二十七才の時、夏の夜の闇に鳴く鳥の声を聞き大悟した。自らを『狂雲子』と蔑み、肉食妻帯を犯し、煩惱に悩み、盲目の森侍者を側女として溺愛した。印可状（悟りの証明）を破り捨て、人間の偽善を喝破した。

『土中の死骨』『愚禿親鸞』『狂雲子』その言葉の表現は異なりますが、内なる自身を徹底的に覗き込み人間の苦悩の本質を見たがため、徹底的に己の愚かさを自己表現したものであり、求道これ道、達観したその先に全てを捨て去った境地を得たものであったと理解できる。

親の心子知らず、南洲翁の懊悩を知らずして、唯々、その功業を誇り、また、城山の非業の死を恨むことに明け暮れる言動は果たし

て南洲翁の魂を慰めることになるのであろうか。大久保甲東公に対する島田一郎等の「斬奸状」を手にして、警護を付けなかったその心境はいかばかりか。はからずも、心ならずも、南洲翁を死に追いやった痛恨の念を知り思いがする。そこには、維新回天に命がけで走り抜いた両雄の死をも超越した絆の深さを思い知らされるものがある。否、知らなければならぬのである。

何故、南洲翁は城山洞窟前で切腹しなかったのか。それは、何が武士か、何が維新の三傑か、何が陸軍大將か、まさに武士を捨てたということであつたと推量される。

上野の、城山下の、溝辺空港前の銅像、今に南洲翁居ませば「何というゲンネコツするか」と、大目玉を食らうこと必定かと。「コン土左衛門を」と。

(天台宗大雄山南泉院住職)

